恐怖！　一回生のみ合宿のたたり
～1977年春合宿レポート

もりのマイドル 世界的怠慢の 小島 正也

## 第一話　殺人的酔払電車

どうも間違いは始めから起っていたようだ。あの悪夢のような大垣行普通電車----。東京駅を出る時までは多少満員の気配はあったが、土日の中央線の急行と思えば屁の河童ってなもんだったんだが、新橋なんかに止まるのが諸悪の根源ってえもんよ。終電間近かの新橋駅とくりゃあもうゴキゲンなおじさん達が来ってくるのは見えみえのみえこちゃん。よう来るよ、この満員電車に。ドアが開いてみ。雪崩込んで来らね。「おっ、たいへんだ、原子爆弾があるぞ～～。」ってなこと言うよな。おーっ。上等だよなっ。そいつはよー。けっ。輪行袋っつーんだぜ。てな具合に言えばいいけど、「おっ何だ何だ。」「自転車だ。」「競輪選手が来ってやがるんだ。」「だいたいこんなもん乗せるから混雑んだ。」「けしからん、いったい国鉄は---。」てな事言って来れりゃあもう極地ってえもんで、ついでに同類の酔っ払いのおじさんが品川で電車を遅らしてくれりゃあもう車内の雰囲気は新幹線並のスピードで下ってかあね。西尾タヌキ寝入り。三浦、大塚ともにヤバイという感じ。熱海を過ぎると通勤人はいなくなるので動ける程度に空く。そこでデッキへ行ってみると原子爆弾の閃光が走った。ピカッ。ズズズーム。な、な、なんと、なんとそこにあった西尾の輪行の輪行袋からは、西尾の自転車がそのタイヤを露出しているではな

いか。なる程、かの酔払氏が中を言い当てたのも当然。と納得しちゃったりなんかすると、名古屋へ電車は到いちゃったりなんかする。
普通の輪行袋三つと、必死にゴムロープでしばられ不自然な姿でかつがれた輪行袋一つが、三月二十六日早朝近鉄名古屋へ向っていったとさ。

第二話　川の水（ぎりのもと）

我々4人、高見峠、伯母峰峠とキャンピング装備のちょっとだるい自転車でひょいひょいと越えてしまったので、気がゆるんだと言われてしまえば、彼方を向いて煙草に火を付けるまでのことよ。ひょいひょいと出走三日目にして、今回初のテント生活となったのは良かったが、春といっても山中の大台ヶ原のお膝元のこと、夜の冷え込みはキビシーくて、シュラフを通して寒気団がイビリに来るのでよく寝れないというよりは、持ってるものを全部着ても寒いというシビアな現実の圧迫が苦しいからといって着ている物を脱ぐわけにはいかないことぐらい大台ヶ原のきょんでも知っていることなのだ。それとは対照的に、日中はさすが南紀と言わせんばかりにポカポカする。下りっ放しでも、体が暖まれば、気持もゆるむし、減数分裂で細胞を製造している身内の皮もゆるむ。(今笑った中で中学生以下の人はあとで職員室まで来るように。)ああのどがかわいたなーと思ったときにきれいな川が流れているのを見れば、一休みしたくなるのは人情って

もんじゃないですか。手を入れれば冷たくて気持ちがいい。ちょっと飲んでみようか。うん飲めるぞ。ところがどっこい上流では運命の神様が立ちションをしていたとはつゆ知らずの4人組であった。鬼ヶ城など見物してYHへ向うと天気もおかくしなって来てキャンプしないでラッキーだと思ったりしたが、YHで三浦と西尾がおかしくなった。どうも風邪らしいといろのだが。そういえばこの二人、夕食のときからおかしくて食欲がなかったのだ。大塚と俺はだいじょぶなのにと考えれば確かあのときは俺たちだけビールを飲んだんだ。運というのは恐ろしい。などと薬を買いに行きながら考えたりしたものでした。そのころ雲の上では、さっきの運命の神様再びオショコをしました。下界では数日の間雨が降りました。

第三話　雨天順延（ばすりんこう）

朝になると西尾は薬も効いたのか元気になったけれど三浦はいぜんとして弱かさく。大塚は「コマッチャタネー」を連発。外は雨が降っているしYHは団体さんがくるとかで連泊不可能という。弱り目にたたり目とはこのことである。大塚と俺はとりあえずリーチできた新宮のYHまで行ってから（もろん雨の中を自転車で）新宮でレンタカーをかりて三浦を移動させることにした。やっとのことでトヨタレンタリースを見つけたが、免許取得三ヶ月以内はダメとあっ

り断られてしまった。大塚と俺は駅までもどり輪行で三浦の自転車を機動させることにした。西尾は走って新宮へ行くことになった。YHのペアレントさんのおすすめでバスで行くことにした。輪行料金はふみ倒してしまった。YHの窓から熊野川が見える。雨は夜まで降り続いていた。夕方過ぎには三浦も回復した。他の班の事などが頭に浮んだ。おもえばたたりのじゅうたん爆撃を受けたような二日間であった。たたりの神さまはどうもいねむりを始めたようで、天気も回復へむかっていた。

第四話　中略

太地→古座峡→潮ノ岬→那智ノ滝→瀞八丁と天気もよく、金谷さん達の班と古座峡で、又那智ノ滝と新宮市内では冨田さんやMの人たちの班と出あったりした。しいて言えば大塚がスポークを折ったぐらいのものだった。瀞八丁でMの堀さんらが帰ると言うことで冨田さんが我が班と合流した。ここで種を明かすと、テントは古座峡で使ったきり串本（潮ノ岬）で送り返してしまったのです。何と。（くわしくはシールポを見よ。）

第五話　大塚（おおつかはどこへいったの）脱走

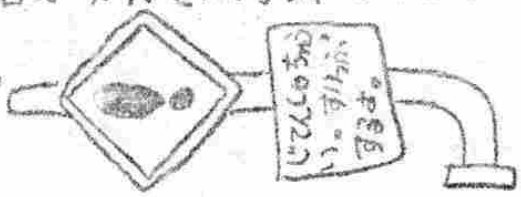
十津川はV字に切り立った深い谷である。合宿も残すところあと二日。熊野本宮から五条へ向う国道168号線を本宮から少し入った所で大塚が突然のダッシュをした。大塚は腹の具合が悪いと言っていたので、おおかたどこかで大がくさいをしているのであろうと思ったが、いつまでたってもいないのである。さて

用足ししている間におい越したかと思い待ったがやって来ない。果して大塚はどこへ行ったのだろうか。前を走っているのか、それとも後か。道も狭いし谷も深いので一時は事故説、死亡説といろいろ出たが、とにかくわからんと言って50km程度本宮から入ってしまった。風屋ダムの所で俺は、はるか下に見える道を通らないか見ていた。西尾はその日に停まるYHまで、もしかするといるかもしれないと大塚を探しに行った。かなり先も見える所なので先にはまずいないと考えたら、西尾が大塚をみつけて帰って来た。何と！大塚は50km近い距離を1人でがっちぎって走っていたのだった。しかし1人で二時間以上も走ったな。

第五章　最後の事故

五条へあと少しという所で運命の神様は目がさめてしまったようである。雨が降ってきた。全員そろってから峠のサミットのトンネルへ向う。トンネルを出ると雨はひどかった。俺は先頭をきって狭いワインディングロードを下り始めた。しばらく雨の中のコーナリングを楽しんでいると、カローラがいつの間にか追いついてしまった。コーナをカローラが回ってから俺もコーナへつっ込むと次の直線部分でカローラのブレーキランプがついた。俺ははっと思いブレーキをかけ、対向車線へはみ出した。すると対向は大型トラックがいる。すれちがいだ。俺はヤバイと思って手に力を入れる。フルブレーキング。しかしカローラの後(テル)が近ずいてくる。戒度幸がにぶい。やばい。俺はガードレールとバウンドするよう

に触れたが、止まらない。だめだ。次の一瞬、僕はガードレールとカローラの間につっ込んだ。ボスっといって止った。トラックが行ってしまいカローラは下りていった。俺もマズッたな。と思いながら下り始めると手がなんかぬるぬるしている。よく見ると出血している。止っていると星田氏らが下りて来た。スピードとは恐しいもので、左手の中、薬指が切れて血が出ている。消毒してもらってから、五条へ向った。




懇天話　帰路（どうしてかえるか）

おち上げが終った次の日は、国鉄が急行以上の全列車をストっていた。たたりの神様はしぶとく我々につきまとったようであった。俺らは近鉄と各駅乗り継ぎで帰ることになった。ほんとうに最始から最後までたたられていた。

◎おわりに、

一年生のみというのはやはりきついというか、不可能というか、決して勧められるものではない。YH中心となったが、深い意味での合宿になろうなかったのはよくなかったようにも思われる。非常時も考えて上級生と班を組むのがやはり良い。酒も深い話も出ぬまま終った床敷だらけの合宿も、もうおもいでしかないのは、どうしようもない事実ではあるが、これを読んだ人が少しでも有意義なサイクリングをすることを望みつつ筆を置きます。　S52年12月2日